

技術開発進み多彩

しわや凹凸 表情変える布

にじみやほかしといった織に様々な色の化学染料を模様を魅力の有松絞。最近では布を糸でくっつけた時の立体的な形、糸をほくく瞬きの美しさが見直され、D Cブランドの素材に積極的に採り入れられています。それは綿や麻や絹を藍で染めるといふ本来の手法に加え、ポリエステルなどの化学

織に様々な色の化学染料を人の参加者により、立体の表現力が見いだされたのです。その後インドとチリで国際絞り会議は続き、世界的交流が進んでいます。職人のステータスには国によって高低が、この会議は職人の視野を広げ、自信にもつながっています。絞りの世界をリードする有松で、商店、職人、作家を訪ねました。

久野染工場の絞り教室。これは藍を使うクラス



機械化で新製品次々 絞り作家の教室も

世界のDCブランドの発業が基本の業界で機械化を表面的洋服が、もの干し台進め、新しい有松絞を次々で色とりどりに揺れる日もと開発している元気な町工場多い「久野染工場」(☎052・621・1041) 6年目の丸岡康治さんは、名鉄有松駅すぐ。手作



有松絞に新風を吹き込む工場的主・久野剛資さんと、加藤豊さん、丸岡康治さん(右から)

ドネシアでの手作業による染めの仕事をを経て、有松・鳴海絞会館の紹介でここに。絞り作家による教室を20年ほど前から開催。材料や道具一式の小売りもしています。



伝統工芸士が実演

「有松・鳴海絞会館」での伝統工芸士の実演。右は結婚以来半巻絞り一筋30年の松岡清子さん。左は小学2年生から母の作業をみて覚えたという三浦絞りの北野とよさん。日本の伝統文化についての卒論を書くという女子大生が見学中。世間話も交え和やか



中では着物の展示会が。手前は社長の竹田浩己さん

江戸時代の模様再現



門に紅白の幕がかかり、扉の開かれた屋敷は市の文化財に指定されている呉服の「竹田嘉兵衛商店」。取材の日は今年初の着物展示会で(年5回開催)、にぎ町並み保存地区にある竹田嘉兵衛商店

名鉄有松駅の西には、江戸時代を忍ばせる町並み保存地区。伝統工芸士が実演する「有松・鳴海絞会館」(☎052・621・0111)や、文化財である豪壮な町屋建築があり第1土・日曜日。業界では後継育成事業も行われています。

ガラスに応用

「蔵工房」(FAX052・624・0658)を構える早川嘉英さん(56)は全工程を自分でこなす作家。現在では磁器やガラスにも絞り模様を施すことに成功。有松駅の高架歩道の手すりを飾るガラス板の一部は早川さんの作で「生活全般に絞りを生かすのが夢」と。名古屋・京都・東京・福岡など全国に拠点を持つ絞り作家を中心とした「絞りコミュニティ」を主宰、毎週火曜は各地を訪ね歩く日。コミュニティの作品展は2年に1度、この秋横浜で、海外の絞り作家も招いて開催予定とのこと。



名鉄有松駅にある絞り模様ガラス板



作家は、手前が最前手の作家。作者の作品は、嘉英さんの作品。早川嘉英の作品